

鳥取県教育文化財団調査報告書 9

# 三浦遺跡

鳥取大学構内における  
考古学遺跡の調査 Ⅱ

1982

鳥 取 大 学  
財団法人 鳥取県教育文化財団

正 誤 表

頁・行數	誤	正
調査関係一覧 総括	春田 明	春田 明
P 2 22行	山型墳墓である。	山型墳墓がある。
	1回約60m	1辺約60m
P 3 5行	三重 百恵	三浦 百重
P 9 3行	癒(挿図8-④、……)	癒(挿図8-⑧、……)
P 26 20行	①古墳ば……	①古墳が……

## 序 文

昭和41年8月に鳥取大学の湖山移転が行われてから15年経過しました。この湖山キャンパスは風光明媚な湖山池を望む台地に立地し、台地上には前方後円墳を含む古墳群や散布地が分布しておりますが、鳥取大学の湖山キャンパスは、現在これらの遺跡との共存をはかりながら、大学の諸施設を増設しています。

今度の調査は、財団法人鳥取県教育文化財団が鳥取大学から「鳥取大学農学部校舎増築計画」に伴う農学部校舎南側丘陵地における事前の発掘調査の委託を受けて実施したものです。

発掘調査の結果、古墳の他、建物跡、特殊な形態をもつ土塙等を確認し、因幡の古代文化の解明にあたっての貴重な資料が呈示されたものと思います。

終りに、この調査を実施するにあたり、事業主体の鳥取大学をはじめとして多くの方々から御指導・御協力をいただきましたことに深く謝意を表します。

昭和57年1月31日

財団法人 鳥取県教育文化財団

常務理事 平木安市

## 例　　言

1. 本報告書は「鳥取大学農学部校舎の増築計画」に伴う三浦古墳とその隣接地についての発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は鳥取大学構内（鳥取市湖山町南4丁目101番地）農学部校舎南側の丘陵部に所在する。
3. 調査は、財団法人鳥取県教育文化財団が鳥取大学より委託を受けて、1981年9月1日から1982年1月31日まで実施した。
4. 調査は、鳥取県教育委員会文化課主事田中弘道氏の指導のもとに、中村徹、坂本敬司、津川ひとみが行った。
5. 本書の執筆は、坂本敬司、津川ひとみの協力により、中村徹が行った。
6. 調査に際し、近藤芳五郎鳥取大学教授より鳥取大学移転以前の鳥取大学用地の写真を提出していただいた。銘記して感謝致します。
7. 図版1の湖山池周辺航空写真は、山陰中央新報社の御好意により、同社刊『ふるさとを飛ぶ』より提出していただいた。銘記して感謝致します。
8. 調査に際し、鳥取大学および湖山・松保・賀露地区の方々をはじめ、多方面からの参加、援助を得た。銘記して感謝します。

## 調査関係一覧

総　括	平木 安市	鳥取県教育文化財団常務理事
	春田　明	同　　事務局長
	太田垣甚一	東部埋蔵文化財調査事務所長
調査指導	田中 弘道	鳥取県教育委員会文化課文化財主事
調査員	中村　徹・坂本 敬司・津川ひとみ	

## 発掘参加者（五十音順・敬称略）

有田やす子、有本弘孝、荒木秀樹、岩田義之、岩成寿義代、漆原広実、岡野悦子、岡本安子、音田恭宏、影井美佐子、加藤千代恵、岸本君子、北野 稔、北脇かよ子、元録孝夫、小坂きみ子、小谷育江、小谷辰子、佐藤敏彦、沢 之裕、清水 亨、下山良二、清山浩司、龍 晶明、多田圭一、田中出夫、田中きく江、田中昌平、田脇さよ子、戸山暢彦、鳥飼一吉、鳥飼千代子、中藤博幸、西原徳善、橋本一恵、星見小夜子、本庄よし子、前田ふさ子、村上松江、村田由美子、本村喜彦、森田 篤、森本すみえ、森本美代子、山内玲子、吉川淳史、米沢とし子、渡辺文子

## 目 次

序 文  
例 言・調査関係者一覧  
目 次  
挿図・図版目次

I	三浦遺跡の位置と環境	1
II	調査経過	3
III	A地区	7
	A地区概要	7
	三浦2号墳	8
IV	B地区	11
	B地区概要	11
	据建て柱建物	11
	特殊土塙（第1土塙墓）	11
	第2土塙墓	15
	第3土塙墓	16
	第4土塙墓	17
	溝	17
V	三浦1号墳	21
VI	まとめ	25

## 挿図・図版・目次

### 挿図目次

挿図 1	三浦遺跡周辺遺跡図	1
2	試掘トレンチ配置図	4
3	全体遺構図	5
4	鳥取大学移転以前の濃山台地 (現教育学部、教養部の敷地)	7
5	同 (現工学部敷地)	7
6	同 (現農学部敷地)	7
7	三浦 2 号墳遺構図	8
8	出土遺物図	9
9	板石出土状況	10
10	三浦 2 号墳作業風景	10
11	掘立て柱建物出土遺物	11
12	遺構図	12
13	特殊土塙遺構図	13
14	出土遺物図	14
15	第 2 土塙墓遺構図	15
16	出土鉄製品	16
17	出土古銭拓本	16
18	第 3 土塙墓遺構図	17
19	第 4 　"	18
20	溝遺構	19
21	岡	20
22	鳥取大学敷地の旧字名	20
23	三浦 1 号墳実測図	21
24	大熊段 1 号墳実測図	22
25	三浦 1 号墳推定復元図	23
26	三浦 1 号墳出土遺物図 1	23
27	三浦 1 号墳出土遺物図 2	24
28	「御留場絵図」	27
29	東部地区古墳一覧表	28

## 図版目次

- 図版 1 湖山池周辺航空写真  
2 烏取大学周辺航空写真、三浦遺跡調査以前  
3 三浦遺跡全景  
4 三浦 2 号墳  
5 " 出土遺物  
6 " "  
7 掘立て柱建物  
8 特殊土塁  
9 " 遺物出土状況、同遺物  
10 " 出土遺物  
11 " "  
12 第 2 土塁墓と出土遺物  
13 第 3・4 土塁墓  
14 溝遺構・作業風景  
15 三浦 1 号墳  
16 " 出土遺物

## 1. 位置と環境

三浦遺跡は、国鉄鳥取駅から4km程西にある湖山池の北東に位置し、鳥取大学の構内にある。湖山池は、沖積世海退期(4,000年前以降)に新砂丘の形成と千代川、野坂川の土砂が沈堆積し埋め残った潟湖で、東西4km、南北2.4km、周囲約16kmの日本で2番目に大きな池である。

この湖山池周辺には、古代の遺跡が多く存在し、古代より人々の生活の場であったこと



挿図1 三浦遺跡周辺遺跡図

がうかがわれる。

鳥取平野周辺部の縄文時代の遺跡は、砂丘地と潟湖によって形成された低湿地上にその立地が見られる。千代川右岸には、砂丘内遺跡を中心とした栗谷遺跡（前～後期）、直浪遺跡（中～後期）、追後遺跡（中～後期）、長者ヶ庭遺跡（後期）、朽木山遺跡（中期）があり、千代川左岸では、湖山池周辺の低湿地に、櫂を出土した桂見遺跡（前～後期）、漆塗りの壺や杓子、籠等が出土した布勢遺跡（中～晚期）がある。また、湖山池には、鳥取県で初めて縄文式土器が発見された青島遺跡（後～晚期）が存在する。その他、現存調査中の湖山第2遺跡をはじめ、湖山池東岸の所々で縄文式土器が採集されている。

弥生時代に入ると稻作の導入もあって、その生活空間が拡がり、千代川左岸の微高地や鳥取平野南部の空山・八坂山山麓にまでその分布がみられる。湖山池周辺をみると、湖山池の東方に岩吉遺跡、天神山遺跡、南には玉造りの工房跡の布勢遺跡、流水文銅鐸を出土した高住遺跡や松原谷田遺跡、西に岩本遺跡、そして北に溝川・末恒・中ノ茶屋などに上器の散布がみられる。また、三浦遺跡のすぐ南には、当財團により現在調査中の湖山第2遺跡（弥・中～古墳）がある。

古墳時代に入るとその遺跡の数は飛躍的に増加し、各地に古墳群が形成されていく。湖山池周辺でも、その東南岸を中心として多くの古墳が築かれている。その中で注目すべきは、桶間1号墳（92m）、布勢古墳（59m）、大熊段1号墳（51m）、三浦1号墳（30m）をはじめとする前方後円墳が湖山池の東・南岸に集中していることであり、その数は大小合わせて13基を数える。この数は、他の地域に比べてこの地域に前方後円墳が集中していることを示している。さらに、本年度、鳥取市教育委員会によって調査され、埴輪の起源（？）かとも思われる器台付壺形土器や台付長頸形土器を出土した西桂見古墳群の四隅突出型墳墓である。この墳墓は弥生時代後期（3世紀後半）のものであるが、その規模は1回約60mを測り、そのころすでに、かなりの勢力を誇った集団が存在したことがうかがわれる。その他、滑石製の子持ち勾玉など特異な遺物が発見された青島遺跡などがある。

律令時代になると、因幡国府が岩美郡国府町に置かれ、千代川右岸が政治の中心となつた。しかしながら、この湖山地方においても因幡国司大江定基の館が築かれたり、和泉式部の生誕の地という伝説が生まれたりする。

中世には、布勢天神山を中心に城下町が築かれ、山名豊国がその居城を久松山の鳥取城に定めるまでの約100年間、この地が、鳥取県東部の政治・経済・文化的一大中心地であった。

## II 調査経過

鳥取大学が昭和41年8月15日に湖山地区に統合移転して以来、学科、講座の増設に伴つていくつかの校舎が増築されてきた。農学部も校舎増築の必要にせまられ、現在、農学部が実験圃場としてさまざまに活用している農学部校舎南側丘陵部がその候補地としてとりあげられた。この丘陵部には、大学の統合移転に尽力された当時の学長三重百恵氏の名にちなんで命名された三浦古墳が存在している。そこで大学は、昭和50年、豊島吉則・小谷伸男両教授にこの丘陵部の土地造成と三浦古墳保存について相談し、測量調査が行なわれた。調査の経過、この古墳は全長36mの前方後円墳であることが確認され、両教授は、この古墳を含む丘陵部の東半分（80m×60m）の区域を古墳保存に必要な区域として報告した。同時に、その西側半分についても、周辺で、古墳より若干古い時期の古式土器片などが採集されていることより、そうした時期の堅穴住居址などが埋蔵されている可能性をつけ加えて報告された。

この報告にしたがい翌51年に、農学部は丘陵西半分についての遺跡の有無の確認の試掘調査を計画し、豊島・小谷両教授によって、昭和51年7月10日から同月31日まで調査が実施された。この調査で、古墳の周溝の一部が検出され、先の前方後円墳に対して、三浦2号墳と命名された。この調査経過は、三浦1号墳の測量調査と合わせて、昭和52年3月、「三浦古墳」－鳥取大学構内における考古学遺跡の調査I－として報告された。その後がきて、「大学南縁の丘陵上はいわば古墳の丘であった。以上四基の古墳（大熊段1・2号墳、三浦1・2号墳）のほか、まだすくなくとも二、三の古墳が存在していた可能性がある」と述べられている。

鳥取大学では、この報告をもとに、農学部校舎の増築を推進するため、昭和56年、未調査区域の遺跡有無の確認を財団法人鳥取県教育文化財團に委託した。委託により、当財團は、同年9月1日から9月16日まで、三浦1・2号墳間の3,000m<sup>2</sup>の区域に対し、10本のトレンチ（250m<sup>2</sup>）を入れ調査した。

調査の結果、第1トレンチにおいて土塙と幅2mの溝状遺構を、また第2トレンチで幅30cmの溝を、第5トレンチでピットと溝を、第6トレンチで貯蔵穴状遺構を検出した。

その結果、この丘陵部における遺跡の範囲は、三浦2号墳周辺 1,800m<sup>2</sup>（A地区）と1号墳西側の第1トレンチを中心とした1,000m<sup>2</sup>（B地区）であると報告した。この結果をもとに、同年9月17日より両地区の全面発掘調査を行った。

調査は、試掘調査時の土層図をもとに、重機で一層ずつ土を除去し、遺構を検出し得る地盤まで掘り下げる方法をとり、A地区より開始した。A地区では、2号墳の全体の規模を確認することができたが埋葬施設等の遺構を認めるることはできなかった。

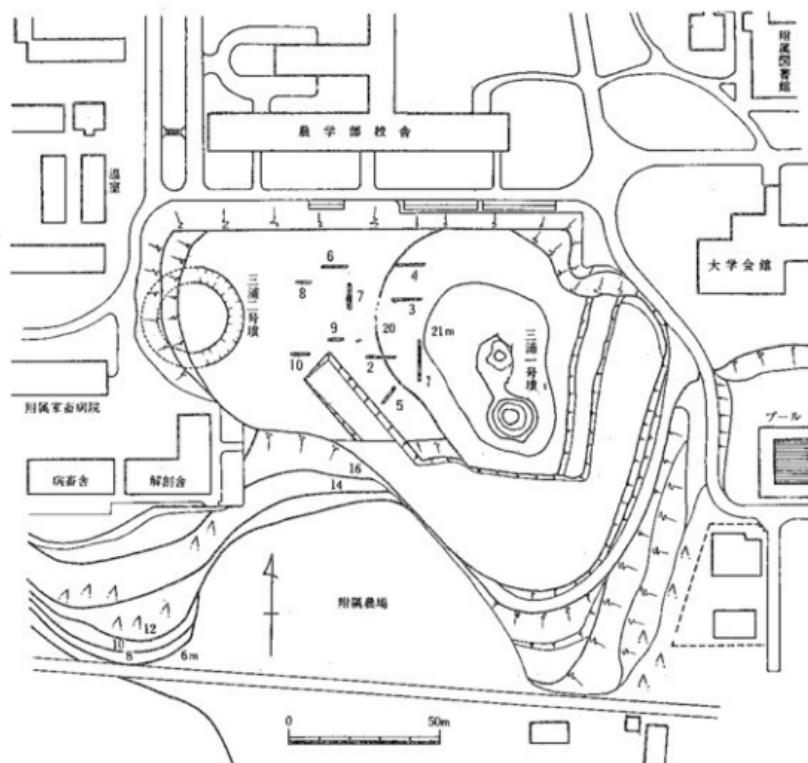
B地区の調査は、9月27日より実施された。

B地区の調査の結果、試掘調査の第1トレンチで検出した土塙は周りに柱跡のある特殊な形態をもつ土塙で、溝は丘陵を南北に分断するものであることがわかった。その他、掘立て柱建物1棟、土塙墓3基、ピット22個を検出し、同年10月14日にB地区の調査を終了した。

しかし、B地区の溝の東半分が1号墳へと伸びており、この溝と1号墳との関係が問題となった。又、1号墳の復元が計画されたこととなり、1号墳周辺にトレンチを入れ調査し、同月20日をもって発掘作業を終了した。

特殊土塙の保存が決定され、1号墳の修復作業とともに、56年12月25日から57年1月15日まで埋めもどしと盛土をおこなった。

整理は、56年10月21日から57年1月31日まである。



挿図2 試掘トレンチ配置図



插図3 三浦遺跡全体図

### III A 地 区

#### A 地区概要

農学部校舎南側丘陵上の西側の約 1,500m<sup>2</sup>を調査対象とした。調査以前は農学部による麦畑・桑畑・松林として研究利用されていた。大学移転以前は、地元の人々の話によれば果樹および野菜の栽培地であったらしい。その当時、この地は平坦地であり既に三浦 2号墳の墳丘は削平されてしまっていることが当時の写真によりうかがうことができる。また、大学移転に伴う造成工事により丘陵部の多くが削られ、2号墳もその時に西側の一部を削りとられている。このA地区は、昭和51年7月10日から7月31日までの間、遺跡有無の確認調査が行なわれたところである。発掘は一部分（約425m<sup>2</sup>）であったが、埋没して



挿図4 烏取大学移転以前の濃山台地1(現教育学部、教養部の敷地)



挿図5 " 2(現工学部敷地)



挿図6 " 3(現農学部敷地)

いた古墳の周溝を検出し、三浦 2 号墳と命名された古墳である。今回の調査は、この地区全域を調査し、2 号墳の全容を明らかにし、同時に、2 号墳周辺の新たな遺構の有無を調査の目的とした。その結果、A 地区では、三浦 2 号墳と 2 号墳の北側を中心とした地域に多くの溝と数個のピットがみつけられたが、溝とピットは農作業に伴う新しい落ち込みであり、結局、A 地区においては、三浦 2 号墳以外の遺構は発見されなかった。

### 三浦 2 号墳

昭和 51 年の鳥取大学の調査により周溝の一部が検出され、その存在が明らかになった古墳である。大学の造成工事により残された農学部校舎南側丘陵部の西端に位置する。造成工事により西側の一部を削りとられてはいるものの、現存する部分から推測すれば墳形は円墳で、直径約 23m、周溝を含めると 32m の規模を測る。周溝は、削られた西側の 4 分の 1 を除けばほぼ円形に一周している。周溝は幅 4 ~ 4.5 m、深さ 0.44 ~ 1.28 m で東側が深くなっている。

墳丘はすでに削平されている。墳丘に相当するところには、幅 20 ~ 50 cm の溝が縦横にみられるが、この溝は 2 号墳周辺にも多くみられることと、この地で桑などが栽培されてい

たことから、農作業に伴う新しい溝であると考えられる。昭和 51 年の調査で、石棺ないし石室の排水溝と考えられた溝もこの溝のことであり、埋葬施設に関するものは既に破壊され、その痕跡を検出することはできなかった。

遺物は北東周溝内において須恵器片を若干採集した。

杯（挿図 8-①、図版 5-①）高台をもつ杯の底部である。高台は粘土紐を貼りつけてつくられており、内湾気味にわずかに外方向に開く。底部は回転ヘラ切りで、他はナデ調整がなされている。



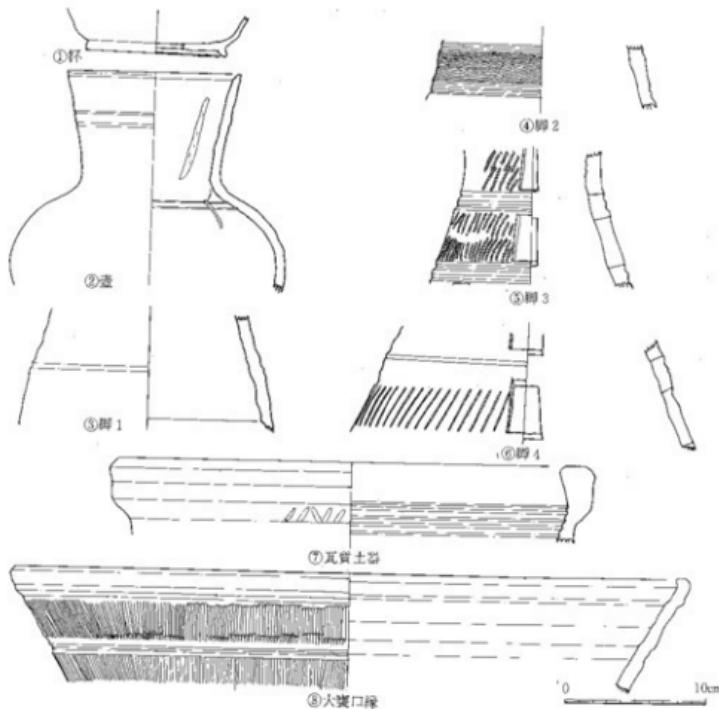
挿図 7 三浦 2 号墳遺構図

壺（挿図 8-②、図版 5-⑦）口頸部が外方向に開く直口壺である。口縁端部は内傾しわずかに団状となる。頸部中央に浅い沈線が 2 条めぐる。

甕（挿図 8-④、図版 6）前回報告された大甕の口頸部と思われる。口縁の推定径は 47.5 cm を測る。口縁端部は平で、内側に折り込まれている。縦方向のカキ目調整が 2 段みられ、両端にはナデによる浅い凹線がみられる。

脚（挿図 8-④～⑥、図版 5-②～⑥）④凹線によって区画された所に、波型の文様をもつ脚部である。⑤装飾壺の脚部と思われる。④と同様、凹線によって区画された部分にそれぞれ透し孔をもつ。⑥透し孔をもつ。透し孔の横に櫛による 2 段の刺突文がわずかにみられる。

瓦質土器（挿図 8-⑦、図版 5-⑧）すり鉢か火鉢と思われる。内面に数条の凹線が刻まれている。



挿図 8 三浦 2 号墳出土遺物図

その他、周溝内底面で安山岩質の板石が多数みられた。板石の形状、大きさは種々様々で、大きなものは70×60-5cmもある。これらの石材は石棺もしくは石蓋土塚の石材としか考えられず<sup>9</sup>、2号墳の埋葬施設の石材と思われる。

これらの遺物は周溝底面でみられ、その上にクロボク層が堆積していることから、この古墳はある時期に破壊されたものと思われる。このことに関して、豊島吉則教授は、「クロボクの形成がかりに中世以前とすると、古墳の破壊は古代末までに行なわれた」と前回の報告で考察されている。

また、『因幡誌』に因幡国司大江定基の館がこの地に築かれていたという記事がみられる。それによると館の位置は、「新川の池口より西へめぐれば山鼻を陥しく切落した所あり、小鱗か鼻或は崩か岸なんと伝うそれより柄岸寺の後の方から引廻して皆其の溝への内なり」とある。「崩ヶ岸」は、現在の鳥取大学構内（字名「三浦」<sup>(注1)</sup>）の一部であり、興味深いことである。

つまり、前回報告された遺物等から考えると、この古墳は6世紀後半に造築され、中世以前に破壊されたものと思われる。

(注1) 挿図22 鳥取大学敷地の旧字名参照



挿図9 板石出土状況



挿図10 三浦2号墳作業風景

## IV B 地 区

### B地区概要

三浦1号墳と2号墳の中間に位置する約1,500m<sup>2</sup>である。この地区は、試掘調査により第1トレンチで溝と埋葬施設を、第2トレンチで幅30cmの溝、第5トレンチで溝およびピット、第7トレンチで直径約1mのピットが検出されていた。調査の結果、古墳の周溝と思われた溝と第5トレンチの溝は、この丘陵部を南北に分断する溝であることがわかり、埋葬施設と思われたものは、特殊な形態をもつ土塙であることが判明した。第2トレンチの溝と第6トレンチのピットは、農作業に伴う新しい溝および貯蔵穴状遺構であることが判明した。しかし、新たに土塙墓3基、掘立柱建物1棟、ピット22個を検出することができた。

### 掘立柱建物

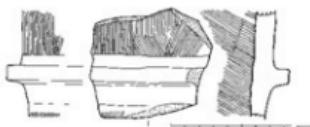
B地区の南西に位置し、丘陵を南北に分断する溝の南側にある。調査以前にかなりの削平がなされているために柱穴がわずかに認められる程度である。主軸を北東—南西にとる梁間2間、桁行2間の総柱建物である。長軸桁行長5.6m、短軸4.8mを測り、床面積約26.9m<sup>2</sup>である。柱穴は西側で1個削られてはいるが8個検出することができた。柱穴プランはP1より(80×65-38)(76×76-29)(95×86-17)(84×77-20)(82×74-24)(80×64-46)(84×67-38)(76×64-28)cmである。各柱穴底の絶対高はP1より19.64、19.60、19.46、19.43、-、19.49、19.65、19.65、19.57mである。各柱穴間距離は外周P1より2.70、2.66、2.18、-、

-、2.85、2.30、2.40mで、内周はP8-P'2より2.60、2.72、2.50、2.80mを測る。遺物はP5より埴輪片が1点のみ出土しているが、これはこの丘陵部に所在していたいすれかの古墳に附隨するものと思われる。古墳時代以降の倉庫跡と思われる。

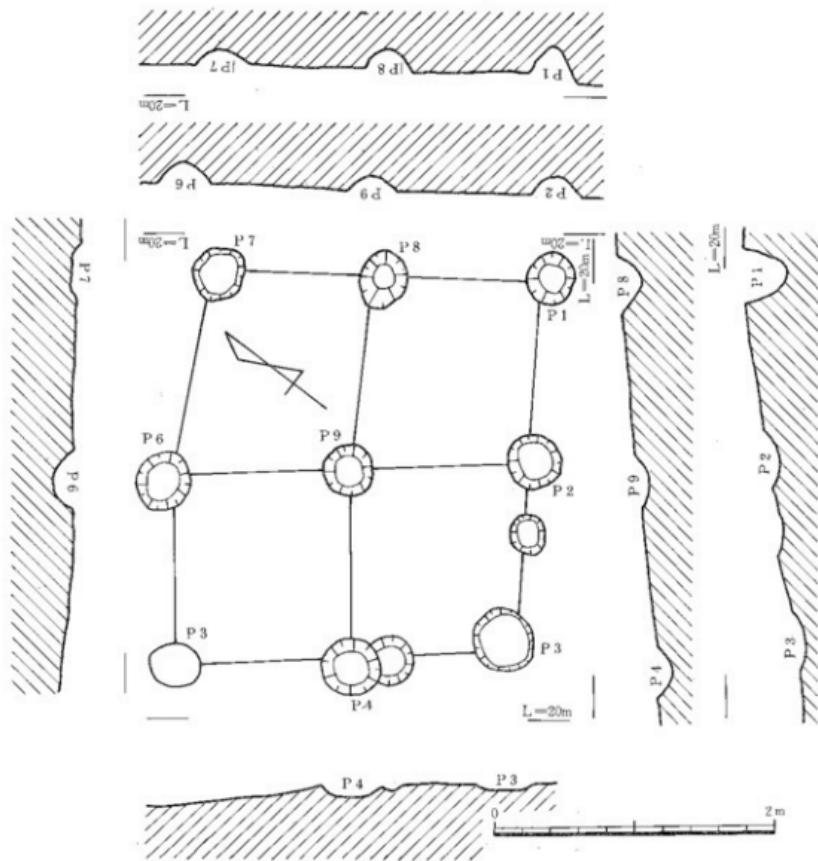
### 特殊土塙（第1土塙墓）

試掘調査時、南側の溝とともに、古墳の埋葬施設ではないかと考えていたものであったが、調査の結果、周溝と考えていた溝は丘陵を南北に分断する溝であることが判明し、埋葬施設ではないかと考えていた遺構も、周りに8本の柱穴をもつ、特殊な形態の土塙であることがわかった。

土塙の平面形は、ややゆがんだ長方形をなし、主軸をN-11.5°-Wにもち、傾斜に対しても主軸を直交させている。上縁長軸3.81m、短軸1.91m、深さ0.20mである。四壁はいく



挿図11 掘立て柱建物出土遺物



挿図12 挖立て柱建物遺構図

ぶんなどらかに掘り込まれている。床面は、北側が高くなっている。わずかに凹凸がある。床面の北にピット ( $23 \times 22 - 10$ ) cm がみられるが、この土塙に関係するものかどうかは不明である。

土塙の周りには 8 個の柱穴が検出されている。梁間 2 間、桁行 2 間の建物で、桁行長 4.30 m、妻通長 2.50 m を測る。各柱穴プランは P1 より  $(30 \times 30 - 45)$   $(29 \times 28 - 20)$   $(30 \times 29 - 46)$   $(32 \times 29 - 43)$   $(30 \times 27 - 43)$   $(30 \times 28 - 21)$   $(30 \times 25 - 47)$   $(28 \times 24 - 41)$  cm である。各柱穴底の絶対高は、20.12、20.36、20.34、20.30、20.15、20.14、20.19、20.18 cm で、その最大差は 24 cm である。各柱穴間距離は P1 より 1.70、2.00、1.35、1.25、

2.40、1.85、1.15、1.14mである。

遺物は、土塙南側中央部において、須恵器の蓋7、杯5、高杯2（挿図14、図版10、11）が、ほとんど完形のままかたまって出土している。

①稜の削減した蓋である。天部外面には約%の回転ヘラ削り調整がみられる。②の高杯の蓋である。（図版10-①）

②かなりゆがんだ高杯である。脚柱部にカキ目調整がほどこされており、三角形の透し孔が3個みられる。透し孔は一段で、その間隔は不規則である。（同一-②）

③高杯④の蓋である。天部と口縁部の境に沈線を巡し、稜をわずかに表現している。口縁端部にわずかな段がみられる。（同一-③）

④底脚柱部に対して杯部が傾斜している。立ちあがりは短く内傾し、端部は丸い。脚柱部に三角形の透し孔を3個もつ。脚部と底部は、稜をもちいて区分している。（同一-④）

⑤偏平な蓋である。天部端部に浅い沈線を巡すことによって、相対的に稜を浮かび上がらせている。天部外面のほとんど全体に、木口状工具によるヘラケズリがなされている。天部内面に同心円がスタンプされ、部分的にナデ消されている。（図版同一-①）

⑥粗雑な杯である。立ち上がりが長く、器高の2分の1近くある。底部は凹状で、全体的に偏平である。底部内面には⑤と同様な同心円のスタンプがみられる。（同一-②）

⑦天部端部の稜線が消えた蓋である。天部のカーブから、わずかにその部分が想像できる。天部が平坦で、偏平な感じがある。天部は雑なヘラケズリがなされ、その幅は大きい。天部内面には、同心円のスタンプがなされている。（同一-②）

⑧杯である。受部は水平で短く丸い。底部の1/2を回転ヘラケズリ調整し、内面には同心円のスタンプがなされている。（同一-④）

⑨全体的に丸みをもった蓋である。稜のかわりに浅い沈線が巡る。天部外面には、十文字の刻目がみられ、内面には同心円がスタンプされている。（同一-⑤）

⑩たちあがりの比較的短い杯である。受部は水平で端部は丸い。⑨の蓋と同様、天上帝外面に十文字の刻目、内面に同心円がスタンプされている。（同-⑥）

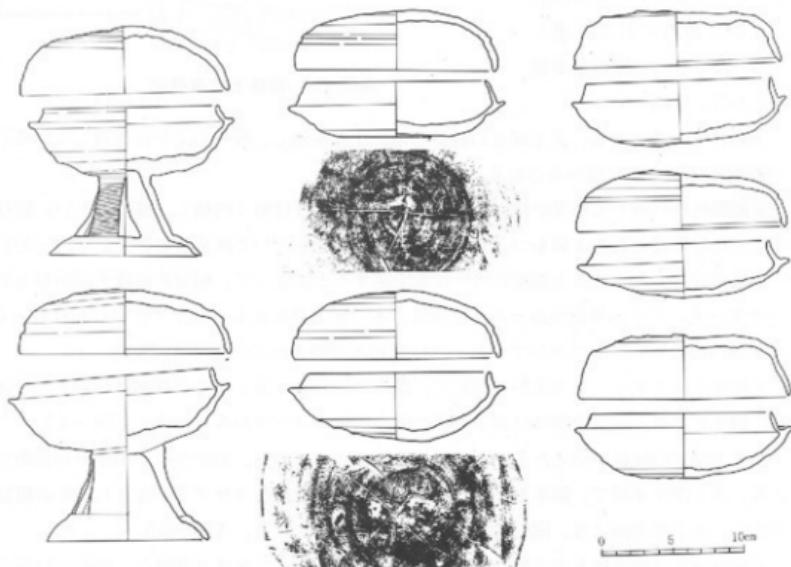
⑪偏平な蓋である。天上帝端部に浅い沈線を巡し、稜を表現している。口縁端部に段をもつ。回転ヘラ削り調整の範囲は約4%である。（同-⑦）

⑫偏平な杯である。内傾するたちあがりは比較的長く、器高の1/4をしめる。底部のはほとんどに回転ヘラ削り調整がみられ、内面には同心円がスタンプされている。（同-⑧）

⑬天上帝が平らで偏平な蓋である。天上帝と口縁部の間の稜の痕跡が消えている。天上帝の約1/2に回転ヘラケズリ調整がなされ、内面は同心円をスタンプしたあと、その多くをナデ消している。（同-⑨）

⑭杯である。たちあがりはオリコミ手法でなされ、短く内傾している。（同-⑩）

これらの遺物の時期は、陶邑編年のII-3~4の時期にあたると思われ、6世紀中頃のものと思われる。



挿図 14 特殊土塚出土遺物図

この遺構は土塙のまわりに8本の柱穴をもつ特異なものである。大きさは人が丁度横たわるほどであり、日常使用する壺・甕等の遺物がなく、高杯と蓋杯が一ヶ所にかたまって出土していること、また、周辺にこの時期の生活関連の遺構が皆無であること等を考えると、この遺構は死と密接な関係をもつ特別な遺構と思われる。

日本書紀「神代記下」に天稚彦の殯に関する記事がある。それによると、味耜高彦神が天稚彦の弔間に訪されたところ、遺族に死者が生きかえったとまちがわれ、けがらわしい死者者とまちがえられた味耜高彦神が怒って、剣をぬいて喪屋をきりふせたとある。これは、喪屋がその程度の簡単な建物であったことを示している。

特殊土塙は、その規模からして、それほどりっぱなものではなく、むしろ、掘立て小屋のような簡単なものであり、喪屋としての可能性は十分考え得る。殯遺構としては、島根県の宮山古墳群や奈良県新山古墳群黒石支群で竪穴住居跡が確認されている。

今回、発見した特殊土塙が「殯跡」であるかどうかは、類似した遺構の発見がないので断定することはできないが、他に生活跡の遺構が周辺に見当らないこと等を考えると、三浦1号墳と密接な関係をもった遺構と考えるのが妥当と思える。

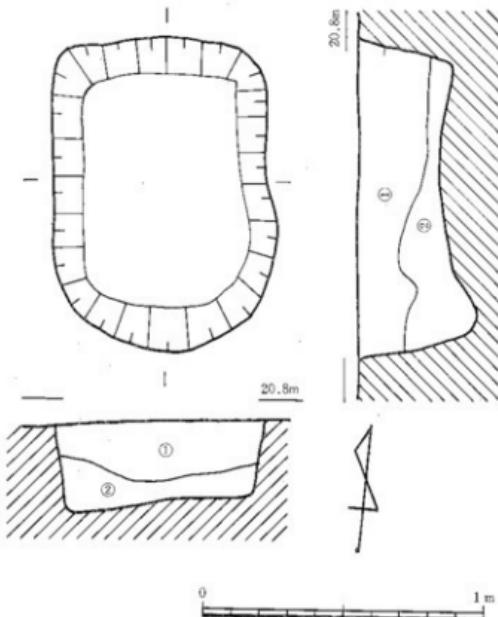
## 第2土塙墓

今回の調査区の東端に位置し、特殊土塙と三浦1号墳の中間にある。主軸をN-8°-Wにもち、平面形は不整形な方形である。上縁長軸112cm、短軸74cmで、四壁はほぼ垂直に掘り込まれている。深さは30cmである。遺物は、第2層で古銭7枚と鉄製品1点が出土している。古銭はいずれも第2層で出土しているが、1枚を除く6枚が床面に積み上げられた状態で出土している。

(1) 第2層の上部北側で出土した。

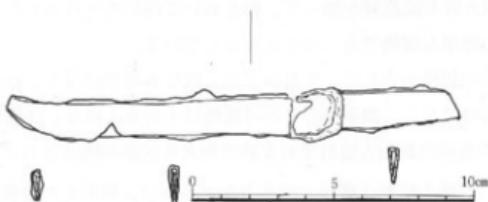
摩滅が著しく、判読できない。

(2)『開元通宝』唐初に初源をも

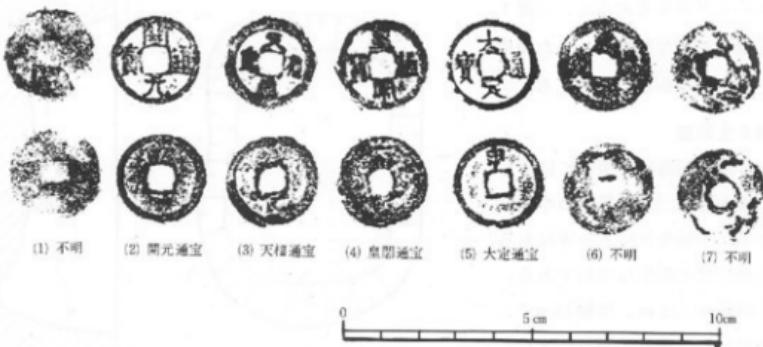


挿図15 第2土塙墓遺構図

つ銭であるが、長く銭造されており、いつの時点のものであるか明らかではない。床面より出土している。(3)『天禧通宝』北宋真宗年間(1017~1020年)に銭造されたものである。(4)『皇閏通宝』「閏」は祐と同字と思われ、北宋仁宗年間(1043~1053年)に銭造されたものである。(5)『大定通宝』金國の貨幣である。世宗年間(1161~1181年)に銭造されている。裏面に「中」の字が刻まれている。(6)(7)解読不明である。鉄製品は刃子と思われる。これらの遺物から判断するならばこの第2土塙墓の時期は12~13世紀以降のものと思われる。



挿図16 第2土塙墓出土鉄製品



挿図17 第2土塙墓出土古錢拓本

### 第3土塙墓

特殊土塙の東隣りに位置し、特殊土塙のP2と重複する。平面形は不整形な方法で、上緑長軸100cm、短軸72cm、深さ14cmを測り、主軸をN-11.7°-Wにもつ。床面には凹凸が多く、特に南壁際には短軸と平行に溝状のものがある。何かを立てた跡かもしれない。遺物は出土しなかったが、第2土塙墓と形態が類似していることにより、同時期のものかと思われる。

#### 第4 土塙墓

第3土塙墓の約2m北にある。上縁長軸153cm、短軸118cmの不整形な方形で、主軸をN-88.5°-Wにもつ。壁はほとんど垂直に掘り込まれており、深さは35cmである。床面は平らである。遺物は出土していないが、第2、3土塙墓と同じ中世のものではないかと考えている。

#### 溝

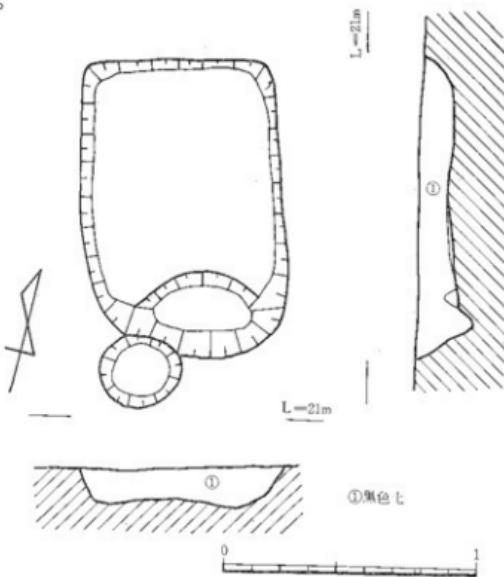
B地区中央に、丘陵を南北に2分する溝が検出された。この溝は、試掘調査時、特殊土塙とともに、古墳の周溝ではないかと考えていたものである。また第5トレンチで検出した遺構もこの溝の一部であった。

溝は丘陵部を北東～東西に一直線に走っている。その長さは

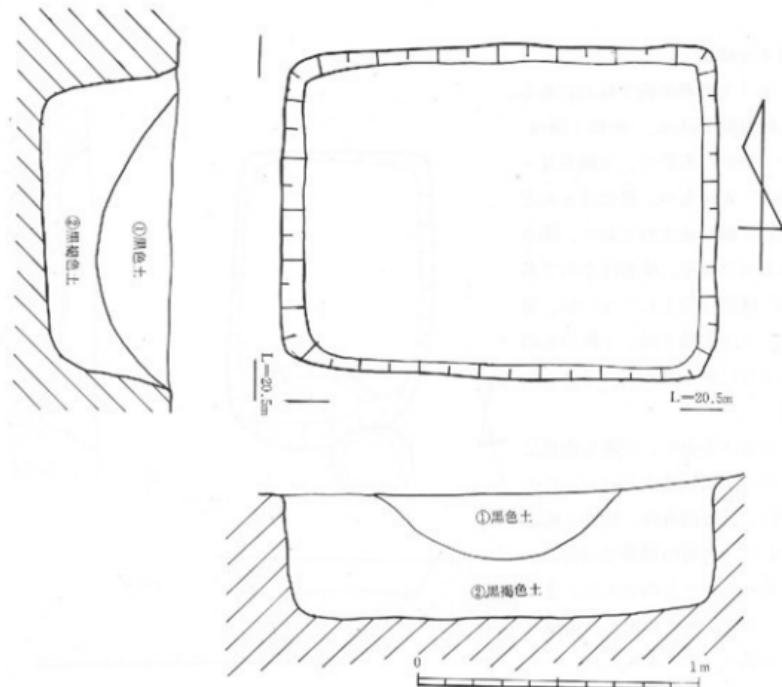
80mあるが、調査したのは西側半分の約38mである。溝の幅は約2.2m、深さ40～140cmで、西側の深い部分は2段掘りになっている。底はやや丸くなっている程度の平たいものであるが、その底面と側面には数多くのピットが掘りこまれている。ピットの大きさは20～70cm大とさまざまであるが、30～40cmのものがほとんどである。これらのピットには規則性がみられず、その性格は不明である。

遺物は、須恵器片と陶質土器の破片が出土しているが、時代の手がかりにはなりえない。この溝は、現在三浦1号墳の前方部と考えられている高まりへと伸びているため、1号墳との関係が問題となってきた。それは、溝がどこまで伸びているのか。1号墳の周溝との関係、1号墳との新旧関係といったものである。

そこで、トレンチによる調査を行ったところ、溝は、思っていたとおり、1号墳の前方部と考えられる高まりの下に消え、再び高まりの中から現れ、東の崩へと直進に伸びていた。溝の通ると思われる所は、一番の高まりのすぐ北側である。1号墳の周溝との関係であるが、まず言えることは、この溝全体が1号墳の周溝とは考えられず、関係があるとすれば、部分的に周溝と共通し合うということである。しかし、このことについては、後述



挿図18 第3土塙墓遺構図

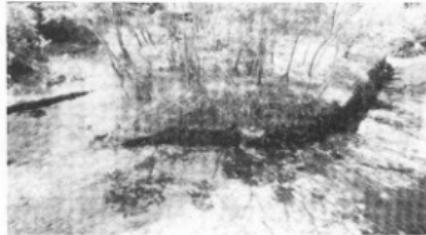


挿図 19 第 4 土塙墓遺構図

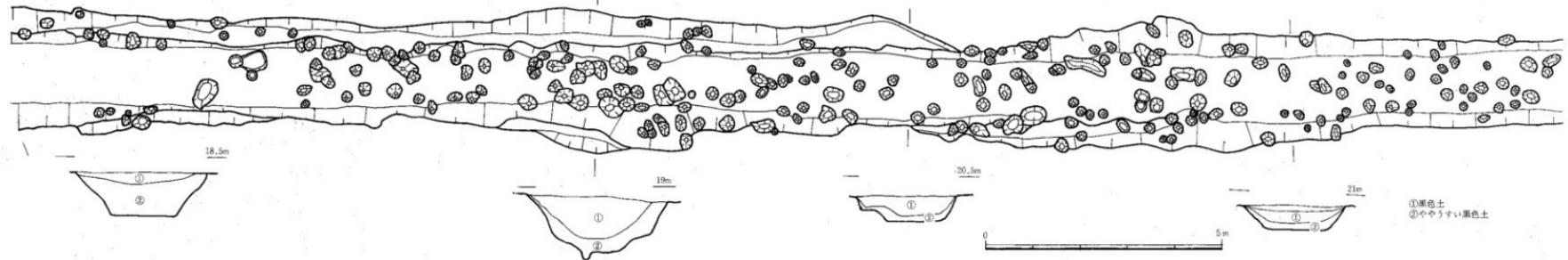
の 1 号墳の項で述べるように、無関係であると思われる。

最後に、1 号墳との新旧関係であるが、現段階において、土砂の堆積状態で判断することができず、不明である。

推測するならば、この溝は、1 号墳を避けて築かれたものであるが、当時の地表は、現在の地表よりも 50cm ばかり高い所にあったと思われ、それが埋没後、開こんにより現地表まで削平されたために、現地形のように、溝が 1 号墳の前方部の中を通る形で残ったものと思われる。



挿図 20 1 号墳と溝遺構



挿図 21 溝遺構図



挿図 22 鳥取大学敷地の旧字名

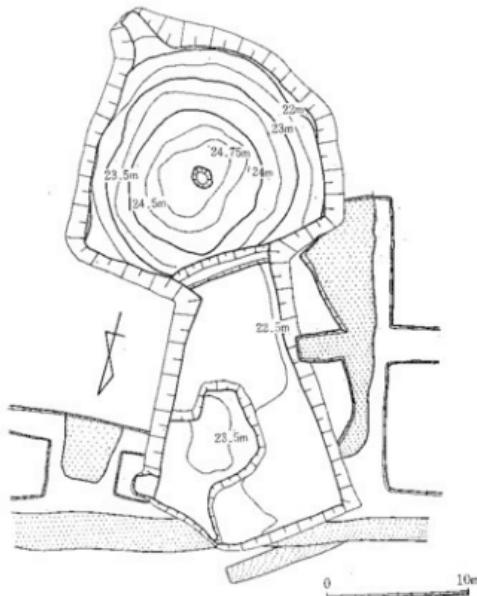
## V 三浦 1 号 墳

三浦 1 号 墳は、B 地区の東の比較的高い所にある。この 1 号 墳の北東約 320m には大熊段 1 号 墳（前方後円墳 51m）と 2 号 墳（円墳、径 23m）がある。三浦 1 号 墳の墳形は前方後円墳であるが、前方部は全面的に削平され、もとの姿をとどめていない。削り残された部分は南北 18m、東西 13m のいびつな五角形をなし、高さ約 185cm が残っている東北端部分を除けば、約 50cm の高さで残されているだけである。

調査は 1 号 墳と溝の関係を明らかにし、同時に、前方部周溝の確認を目的とした。

調査の結果、溝が前方部先端と交錯していることは前述のとおりである。しかし、これ以上は、墳丘にトレンチを入れ調査する以外に方法がなく、明らかでない。

前方部周溝は、前方部の東西で確認できたが先端部まで巡っていない。先端部周溝があるとするならば、前方部と考えられる高まりの下、あるいは溝遺構と部分的に重複するであろうが、周溝の有無を確認するためには、高まりにトレンチを入れて調査する方法しかな



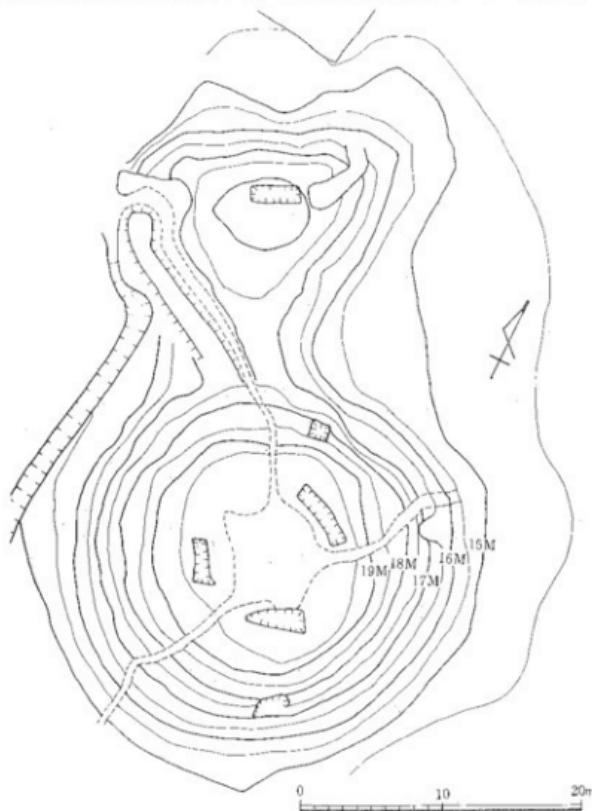
插図 23 三浦 1 号 墳 実測図

く、不明である。

確認された周溝から1号墳を推定復元すれば、1号墳は大熊段1号墳(挿図24)と同様前方部が三角形状にひろがるもの、その幅は後円径よりも小さい。高さは、現在で約1.25m後円部が高くなっている。後世に削平されてはいるが、前方部を凌駕するほどもなかつと思われ、中期（5世紀型）の前方後円墳と思われる。周溝は半円台形型と思われるが、前方部先端を巡るか否かは不明である。1号墳の規模は、墳丘長30～33m、後円部径18.5m、同高2.75m、前方部幅14m、高さ約2mかと思われる。長軸は南北方向で17.5度西に偏っていると思われる。

内部施設は未発掘のため明らかではないが、地元の尾崎暢治氏の話によれば、前方部と後円部の各々に石棺があり、現在も埋っているとのことであるが、その場所は不明である。

注1

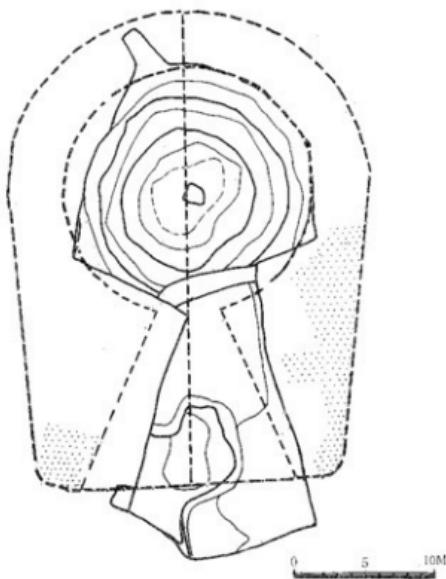


挿図24 大熊段1号墳実測図

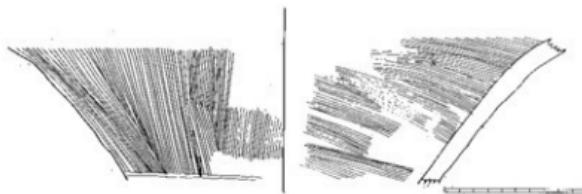
遺物は、周溝上部より土師器、須恵器、土師質土器、埴輪等の土器片が出土しているが、いずれも細片である。埴輪片の多くは同窓埴輪で、直径20cm内外である。その他、朝顔形埴輪、形象埴輪と思われるものもある。

古墳築造年代は、墳形から考えれば、中期型のものと思われる。しかし、51年の調査時採集された須恵器は6世紀中頃のものであるため、形態的には前世紀の姿を残しながら、後期に築造されたものと思われる。

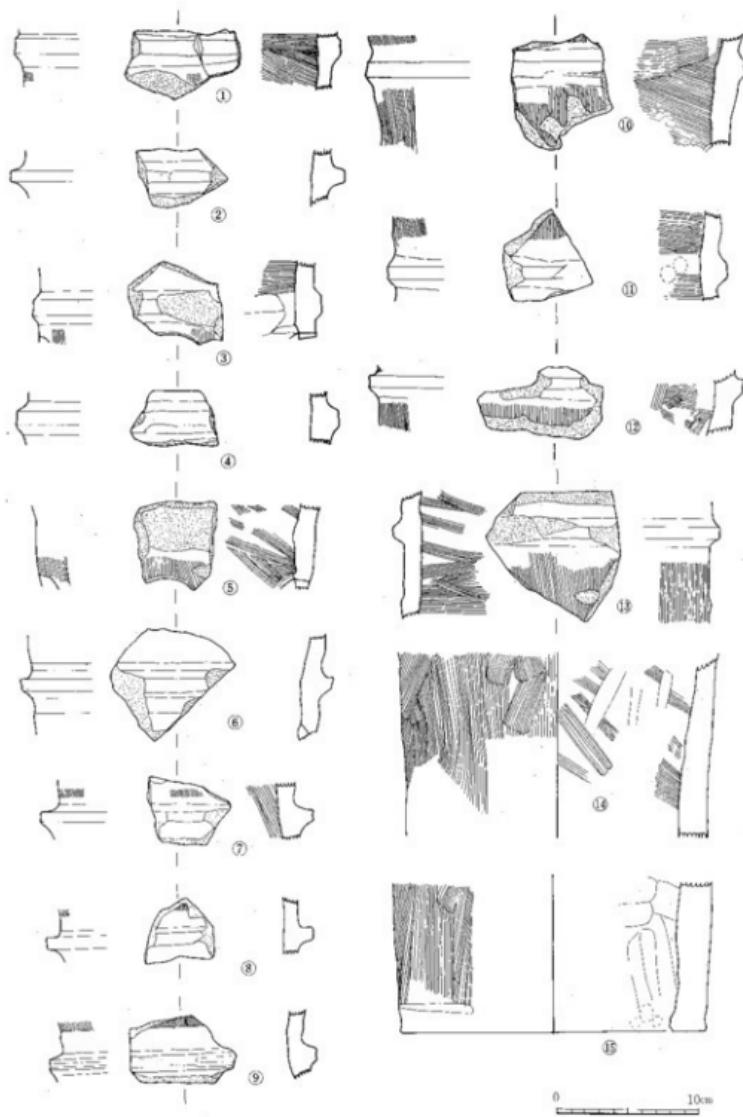
注1 測量図は鳥取大学による。



挿図 25 三浦 1 号墳推定復元図



挿図 26 三浦 1 号墳出土遺物図 1



插図 27 三浦 1号 墓出土遺物図 2

## VI まとめ

以上、鳥取大学構内の三浦遺跡について紹介してきたが、調査区域は丘陵部の西半分のみで、東半分は依然として不明のままである。

鳥取大学は約12万m<sup>2</sup>という広大な敷地のうえにある。以前、この地は「濃山台地」といわれる畠地であった。開墾によって平坦となったが、「御留場絵図」をみると、いくつかの高まりがみられ、古代には多くの古墳があったと思われる。梅原末治著『因伯国における古墳の調査』によれば、「脇山大熊段にある4個の墳塚の1個は、北向の前方後円墳にして、後円封上の特に著しきもの、前後の長径168尺に対し、後円の径115尺、高さ25尺、前方端の幅は48尺……中略……、この塚の南方にて拾得の金環1個……中略……、字跪ヶ墓及び紺屋鼻は共に前者の西方に當りて、湖岸に近き壠地端に位する処、同じく古墳あり。跪ヶ墓のそれは前年開墾の際大部分破壊し、去るも、なほ、図版40-2に示すが如き完形を存するものあり、径8間高さ15尺を測る可し。また其の破壊の際出土したる遺品は湖山小学校所蔵の弥生式土器3個（壺1、高杯形2）は既に報告書第一冊に採録せしがこれ荒さし古墳は同地田中永治氏の所有地内にありしものにして、径34間、高さ1間内外の円丘をなし、主体の構造箱式棺ありしが如し。」とある。また、『湖山地誌考』には、片岡校長所有地ニ大円ノ琵琶隈ト命令セル所アリ此名ヨリ察スルニ此ノ塚ハ前方後円墳ノ如ク思ワル（或ハ大円墳一小円墳ニ、集リヤモ知レズ）兎モ角モ側面ヨリ見テ琵琶ノ如キ形ニ見ユルニヨリツケタル名ナラン」と記載してある。この琵琶隅は『湖山のあけぼの』によると、旧氣六山上にある円墳と記してあるが、写真より判断すれば、三浦1号墳のことと思われる。

ここで、三浦1号墳、三浦2号墳の調査結果をもう一度まとめてみよう。

### 1. 三浦1号墳

①幅3mの周濠をもつ前方後円墳であること。ただし、前方部分の周濠の有無は確認できなかった。

②埴輪片が多数出土しており、円筒埴輪、形象埴輪を有するものであること。

③埋葬施設は、地元の尾崎暢治によると箱式石棺が露出していたといわれるが、今は実見できない。

④時期は、昭和51年度鳥取大学による調査で、6世紀中頃の須恵器片が表採されている。また、今回、調査した特殊土塗からも6世紀中頃の須恵器が出土しており、この時期と考えて差しつかえないと思う。

### 2. 三浦2号墳

①直径32mの規模をもつ円墳である。

②幅4m、深さ1mの周溝をもつ。

③埴輪片が少量ではあるが出土している。

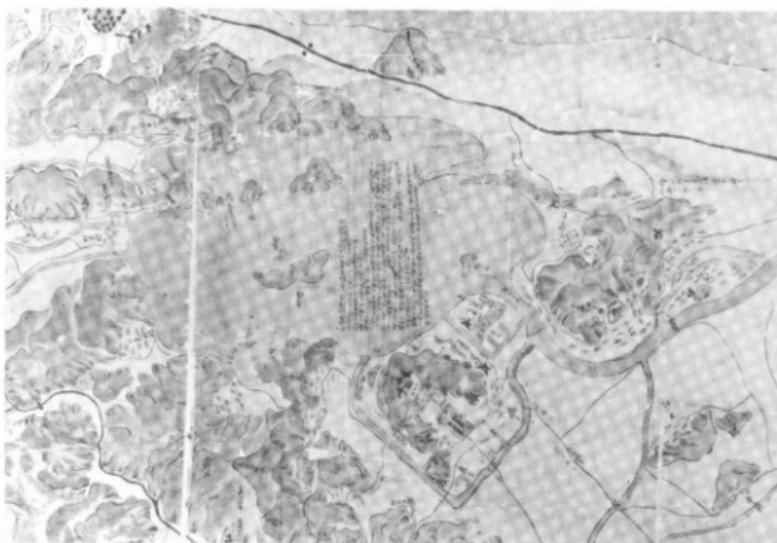
- ④埋葬施設は、墳丘が削平されているため不明である。しかし、周濠内に石棺材と考えられる扁平な板石が多数発見されており、箱式石棺であったと考えてよかろう。
- ⑤時期は、周濠内出土の須恵器片からみて、6世紀後半、1号墳より少し新しい時期と考えられる。
- ⑥その他、周濠内には、8世紀頃の須恵器片、土師器片が底部付近から石棺材と共に検出されており、この古墳がそのころから破壊され始めたと考えられる。

以上が、三浦1号墳、2号墳の調査結果の概略であるが、ここで、とり上げておきたい問題がある。それは、埋葬施設が箱式石棺であるという点である。箱式石棺は縄文時代からの普遍的な埋葬施設ではあるが、6世紀中～後半の時期に、長さ30m（推定）の前方後円墳や直径32mの円墳で、周間に大きな周溝をもつ、首長級の古墳の埋葬施設が箱式石棺であるという点に不自然を感じるのである。（1号墳については、墳丘内の調査を行なっていないので、箱式石棺以外の埋葬施設が存在する可能性はある。）

表1は、鳥取県東部地区（因幡地方）で発掘調査等によって、埋葬施設の構造及びその時期が明らかにされている古墳の一覧表である。これによると、埋葬施設が箱式石棺及び土塙墓のものは、およそ4世紀から6世紀前半に、また、横穴式石室のものは6世紀中頃から7世紀前半に大別される。

今回調査した三浦1号墳、2号墳は先に述べたように6世紀中～後半の時期のものと考えられ、この時期に箱式石棺の埋葬施設をもつ古墳が若干見られる。開地谷6、9、21号墳（以下開地谷古墳群となる。）と、稻荷7、11号墳（以下稻荷古墳群とする。）などである。開地谷古墳群と稻荷古墳群は、①古墳ば群集してみられること。②それぞれの古墳の規模が15m内外の小円墳であること。と同じ様相を示す点もあるが、決定的に異なる点は副葬品として埋葬されている鉄器の量である。開地谷古墳群では鉄器をはじめ、馬具、刀等大量の鉄製品がみられるのに対し、稻荷古墳群では極く少量にしか発見されていない。鉄器が大量に普及するこの時期に、このような差異が認められるのはなぜか、今後検討しなければならないことである。次に、三浦1・2号墳についてはどうであろうか。埋葬施設が破壊されていて、実見することができない等、確証はないが、大正時代から現在に至るまで鉄製品が大量に出土したという記録はなく、また、周間に大きな周溝をもち古い様相を示す古墳の形態や、西ノ岡古墳の存在でもわかるように、少なくとも6世紀中頃の因幡地方に横穴式石室が出現している等から、三浦1・2号墳の存在する湖山池周辺が非常に保守的な地域であったと考えられないだろうか。また、次の時期に国府町周辺に横穴式石室が爆発的に増加するのに対し、湖山池周辺においてはそれほど多くの横穴式石室は認められない。これは4世紀以来、因幡地方唯一の古墳文化を誇っていた湖山池周辺の勢力が、国府町周辺の勢力にこの時期を期してその座を譲り、没落していくその消長であり、まさに歴史としかいいようがない。

※ ①「鳥取県史蹟勝跡調査報告第2冊」大正13年鳥取県  
②気高郡湖山尋常高等小学校 湖山村郷土研究叢書第7編  
③鳥取市湖山町公民館内大学統合移転湖山町対策協議会



挿図 28 「御留場絵図」

東部地区古墳一覧表

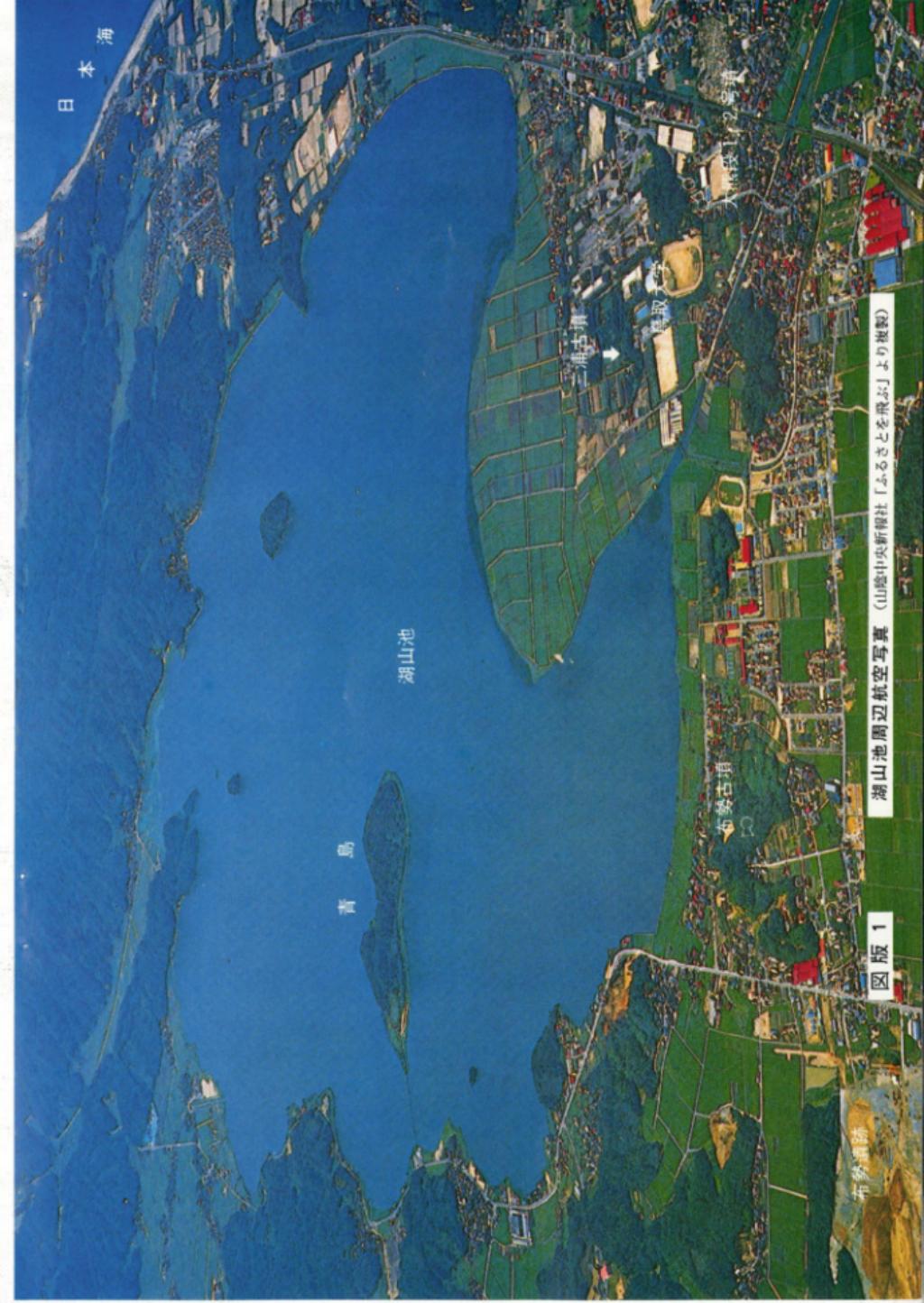
名 称	所 在 地	墳 形 規 模(m) 立 地	出 出 土 遺 遗 物 物	埋 葬 施 設 種 類・規 模(cm)	期 間
古郡家 1号墳	古郡家	前方後円墳 (前長90 後円部径48 丘 陵)	埴輪片・土師器(甕・高杯)・ 勾玉1・管玉19・鐵劍片1・ 異形銅鏡1・土師器壺・素文 鏡・くし4・劍5・鐵鏡25・刀 子3・やりかんな3・きり状 鐵製品1・針状鐵製品1・短 甲1	粘土 箱式石棺 2号棺43×143 3号棺45×190	4~ 4~ 5C (『ひす い』68, 82)
糸谷 1号墳	国府町大字 糸谷字山ヶ鼻	四隅突出型 10m × 7m 尾根先端	壺、壺、高杯、低脚杯、器台 楕、皿、鐵劍、匙	土塚墓9 木棺墓2	4 C
糸谷 3号墳	糸谷	長方形 11×13m 尾根	甕、壺、高杯 刀子・針 人骨・石枕、土器枕	箱式石棺墓5 木棺墓1 土塚墓1 土器棺墓1	5 C
糸谷 7号墳	糸谷	円形 11m 尾根	高杯(枕)	土塚墓2	5 C
二本木 7号墳	氣高町二本木	長方形 17×22m 尾根	壺、高杯	土塚墓4	4 C
大口 2号墳	青谷町大坪 字大口	?? 尾根	甕	土塚墓7	4 C
古海 古墳	古墳	10~12×1.3m 山陵	古式土師器器台2	箱式石棺 48×200	5 C
湯山 6号墳	岩美町福部村	円(?) 尾根先端	土師器器台 鐵刀3・短甲1・鐵鏡17(棺 外)・櫛1・眉庇付舟1	箱式石棺	5 C 初
郷原 1号墳	八頭郡河原町 郷原上山	円墳 8×1 m 丘陵	刀2・刀1・土師器高杯5	箱式石棺 130×360	5 C
下露谷 1号墳	青高郡青谷町 下露谷	円(?) 丘陵尾根先端	須恵器(杯)・土師器(杯・楕)	箱式石棺 50×120 60×120	6 C 初 頭
緑山 2号墳	緑山	円墳(推定)	棺外…須恵器(高杯1・杯3) 棺内…刀2・刀子2・斧頭1 鐵鏡3・棺内	箱式石棺 75×185	6 C 初 頭
西浦山 1号墳	国府町美歎	不明 山腹(西浦山)	須恵器(高杯)…棺外 刀子2・鐵鏡7・ガラス小玉 81・人骨	箱式石棺 75×255cm	6 C 中
開地谷 6号墳	鳥取市浜坂	円墳 15× 丘陵	須恵器(杯18・高杯7)・カラ ス貝殻4・鐵斧・馬具のくつ わ・壺あぶみ・鐵鏡38・直刀 その他刀子1	箱式石棺 88×215	6 C 後 半

名 称	所 在 地	墳 規 立 形 模(m) 地	出 土 遺 物	埋 葬 施 設 種類・規 模(m)	時 期
開地谷 9号墳	鳥取市浜坂	? 丘陵	須恵器杯10、勾玉2、直刀1 鐵劍10、刀子5	箱式石棺 65×160	6C後半
夕 21号墳	夕 夕	? 丘陵	蓋杯2、管玉5、切子玉1	箱式石棺 38×152	6C後半
福荷 2号墳	郡家町大字 福荷	円 9.6m 尾根	須恵器(蓋)(棺外)	箱式石棺 28cm×88cm	6C中半
夕 6号墳	夕 夕	円 8.8m 尾根	須恵器(杯・蓋)	土塚? 1.8×3.2m	6C中半
夕 7号墳	夕 夕	円 11cm 尾根先端	刀(棺内) 拂土中須恵器	箱式石棺1 11×2m 他に土塚2?	6C前半～7C前半
夕 11号墳	夕 夕	円 8.2m 尾根	須恵器(杯・蓋)	箱式石棺 47.5×165	6C後半
夕 12号墳	夕 夕	円 9m 尾根	須恵器(蓋・杯)	箱式石棺 47.5×165	5C末～6C初
西ノ岡 古墳	船岡町大字 福井字西ノ岡	12m 沖積扇状地	須恵器(杯・高杯・蓋・壺・壺 瓶)直刀、鐵劍、刀子、鏡	横穴式石室 1.94×?	6C中半
新井 1号墳	夕 岩美町 新井	前方後圓墳 (後円部径10 高2 前方部巾8)	(第1石室)須恵器(高杯1 蓋・杯6) (中央部)直刀1、鐵劍8、砥 石1 (西側)須恵器(杯17、壺1)鐵 劍8、環1 (墳丘上)須恵器(蓋・壺・高 杯)、土師器高杯	堅穴式石室 130×360	6C中半
向羅 1号墳	夕 佐貫	円墳 12×3m 丘陵斜南	須恵器(平瓶2、壺3、高杯 1・杯10)、鐵劍4、斧頭1、 刀子2、刀1、馬具1、耳環 1、管玉1、ガラス丸玉8、 青銅器片	横穴式石室 240×230	6C後半
余井 古墳	用瀬町美成 字吹出	円 11.7m 河岸段丘	須恵器(杯・高杯・蓋・台付 壺・壺・提瓶・壺・壺)、土師 器(壺・蓋)、鐵劍5、刀子1 馬具、鏡1	横穴式石室 150×460	6C末～7C初
西御門 古墳	夕 西御門	円墳	蓋杯、高杯、台付壺、提瓶、 平瓶、壺、鐵器	横穴式石室	6C末～7C初
熊田 古墳	鳥取市	? 段丘	須恵器(杯・蓋・文杯・提瓶) 石鑊、鐵劍	横穴式石室 120×	6C末～7C初
鷹狩 1号墳	夕 用瀬町 鷹狩	円墳(推定) 平地	刀2、勾玉2、切子玉1、須 恵器69(杯42、高杯11・まり 3・提瓶1・平瓶1・壺7・ 壺2・壺2)	横穴式石室 195×395	7C前半

名 称	所 在 地	墳 形 規 模(m) 立 地	出 土 遺 物	埋 葬 施 設 種 類・規 模(cm)	時 期
梶山古墳	国府町岡益字梶山の上	馬蹄形(?) 20m 鞍部	須恵器(杯・蓋・高杯・低脚 杯・長頸壺・有蓋短頸壺・平 瓶・まり)、土師器(壺・碗)、 瓦状遺物、刀子1、棺金具状 金製薄延板	横穴式石室(切 石) 彩色画 136×238	7 C 前 半
緑山1号墳	夕 福部村 海士	円墳 丘陵	須恵器(杯4・蓋・杯4) 鉄鏡3	堅穴式石室 彩色画 120×230	7 C 前 半
小畠8号墳	岩美郡大字 大谷字入道谷	円墳(推定) 11m 鞍部	須恵器(杯・蓋・高杯・平瓶・ 横瓶)、鉄鏡、鉄柶、鉄刀子、 鐵錐子、耳環、ガラス小玉	横穴式石室 150×370	7 C 前 半
野原3号墳	夕 智頭町 野原	円墳 12m 山麓	須恵器(杯・高杯・提瓶・横 瓶・螺・壺)、直刀、刀子、鐵 管玉	横穴式石室 170×640	7 C 前 半
大谷平古墳	船岡町坂田字 大谷平	円 12.5m	須恵器(杯・高杯・壺・提瓶 ほか)、直刀6、刀子1、鉄鏡 13以上、鉄製品	横穴式石室	7 C 前 半
米岡2号墳	郡家町坂田字 上ノ谷	山腹	須恵器(杯・蓋・高杯) 土師器杯、刀子片1	横穴式石室 142×204	7 C 後 半

図版 1

湖山池周辺航空写真 (山陰中央新報社「ふるさとを飛ぶ」より複製)



日本海

青島

湖山池

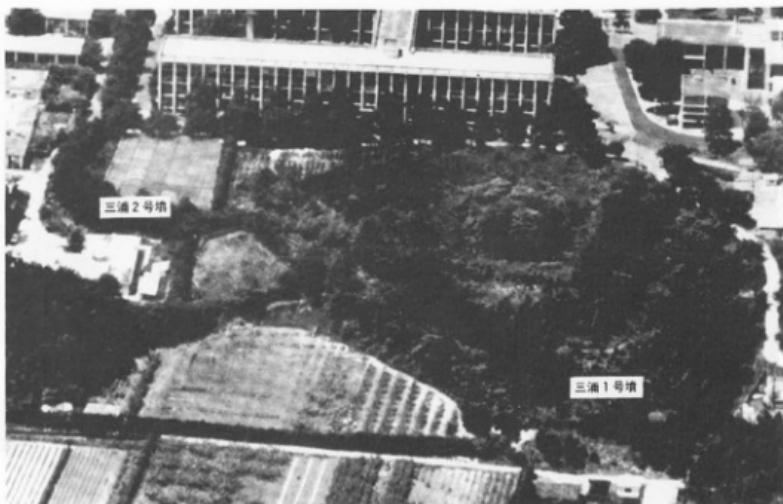
布勢町

古賀町

布勢道場



鳥取大学周辺航空写真



三浦遺跡 調査以前

図  
版  
3



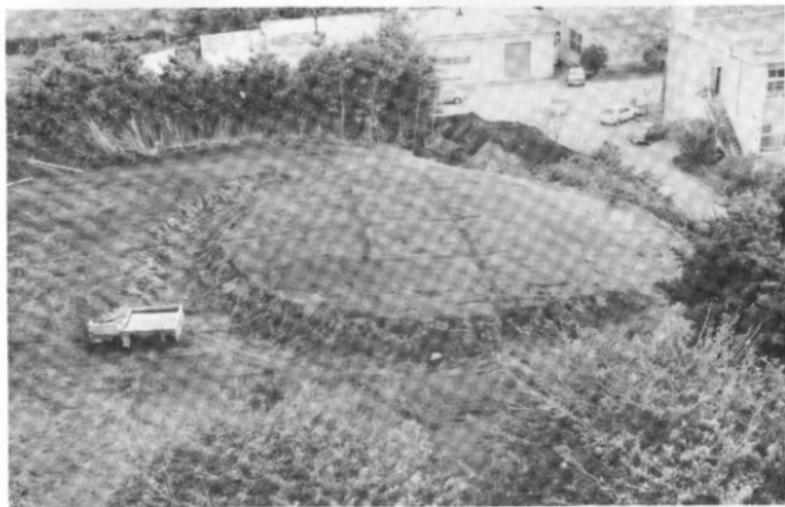
三浦遺跡全体写真（南から）



三浦遺跡全体写真（東から）



三浦 2 号墳（東から）



三浦 2 号墳（北から）



杯



脚 1



脚 2



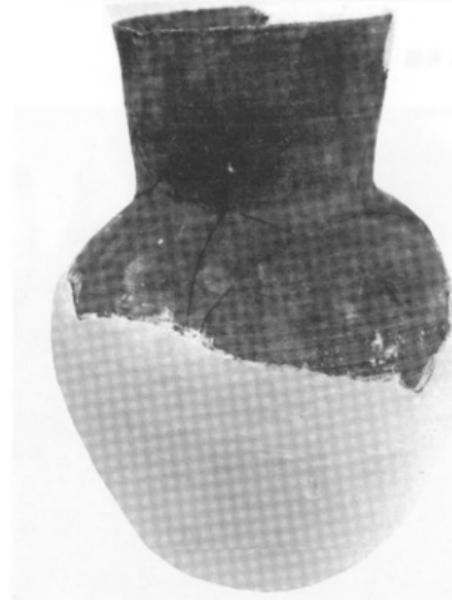
脚 3



脚 4



脚 5



壺



瓦質土器



同

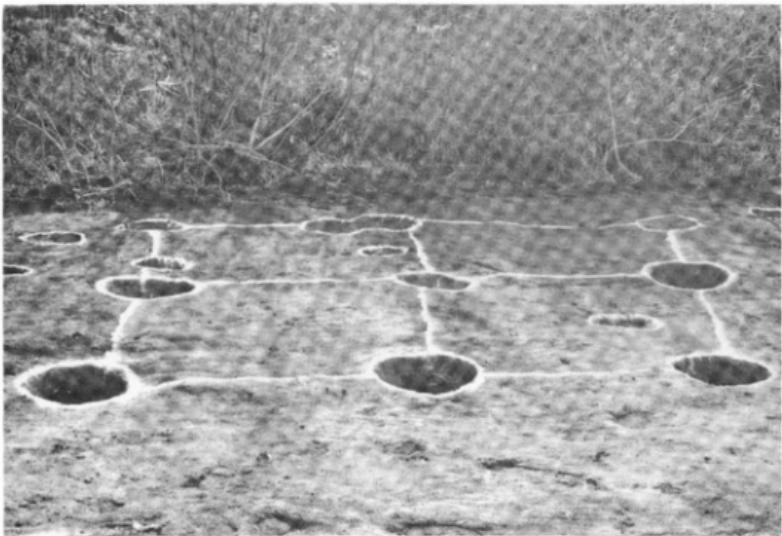


大壺口縁部



同 脇部破片

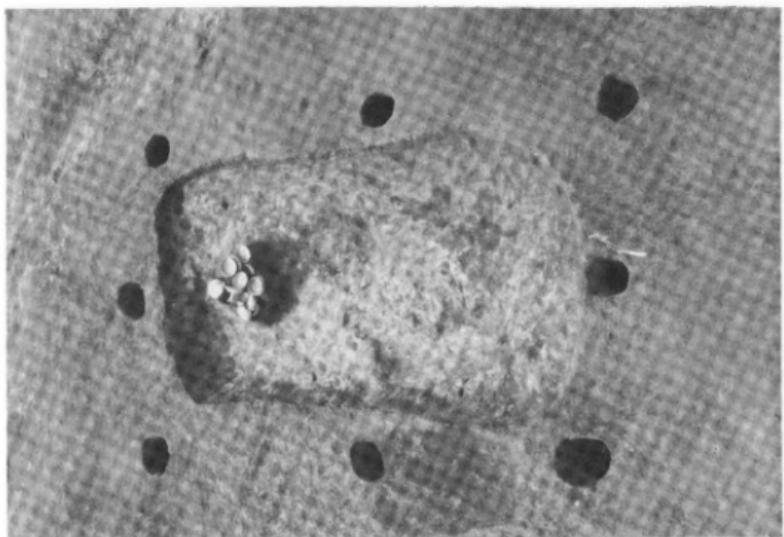
図版  
7



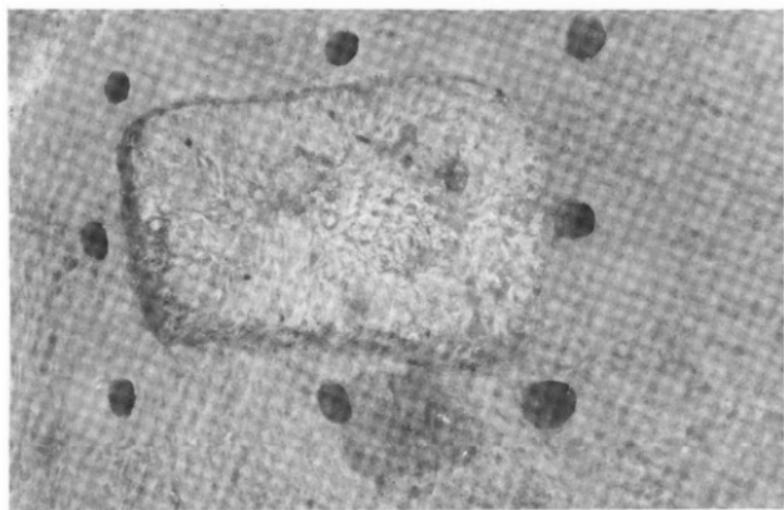
掘立て柱建物（東より）



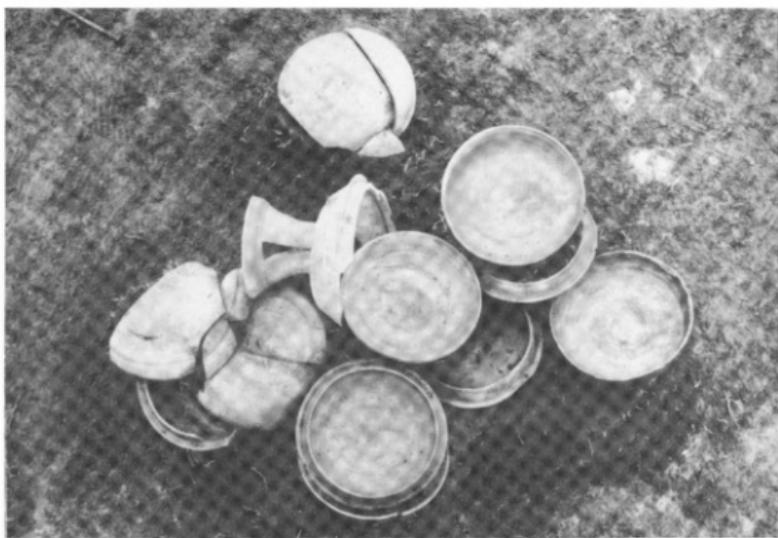
同 （北より）



特殊土壠（北より）



同（同）

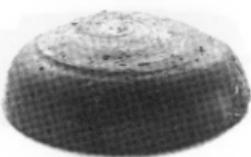


特殊土竈遺物出土狀況



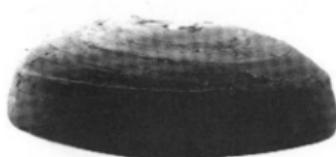
同 遺物

圖版 10 (特殊土塚出土遺物)

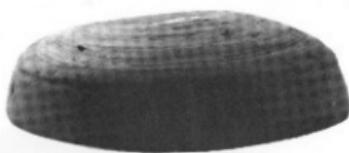


高杯

圖版 11 (特殊土塗出土遺物)



蓋 1



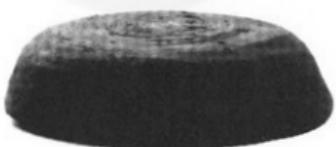
蓋 4



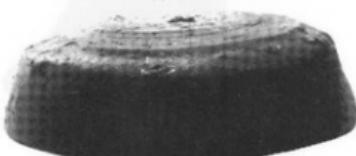
杯 1



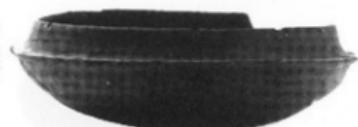
杯 4



蓋 2



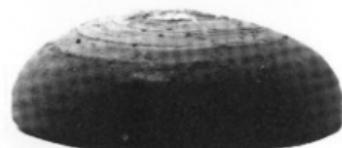
蓋 5



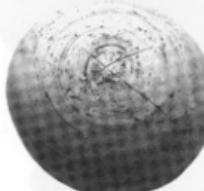
杯 2



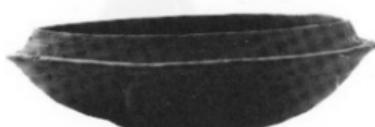
杯 5



蓋 3



蓋 3



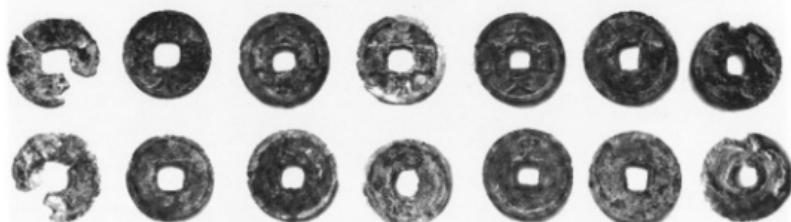
杯 3



杯 3



第2土塚墓



(1) 不明

(2) 開元通寶

(3) 天祐通寶

(4) 皇闕通寶

(5) 大定通寶

(6) 不明

(7) 不明

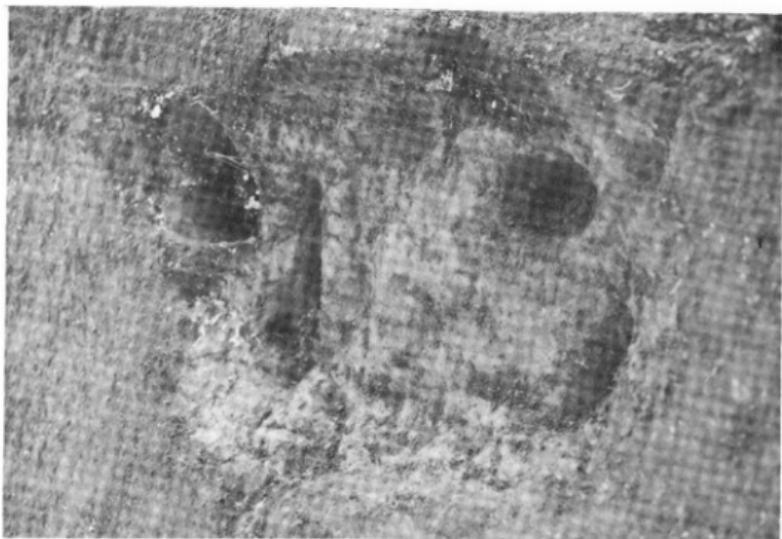
第2土塚墓出土

古錢

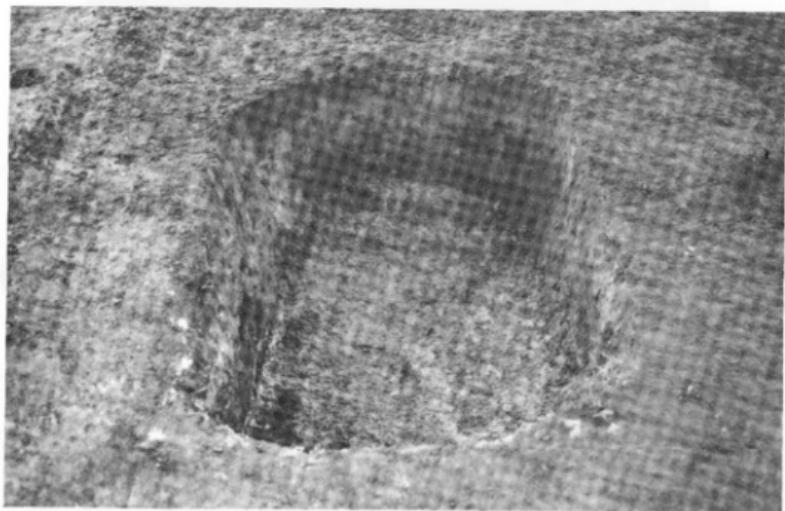


同

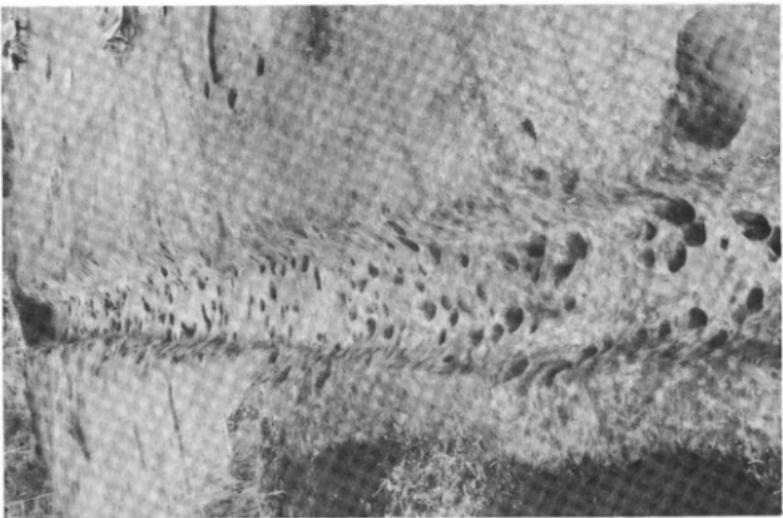
鐵製



第3土塚墓



第4土塚墓





三浦 1号墳 復元前（北西より）



同 復元後（同）

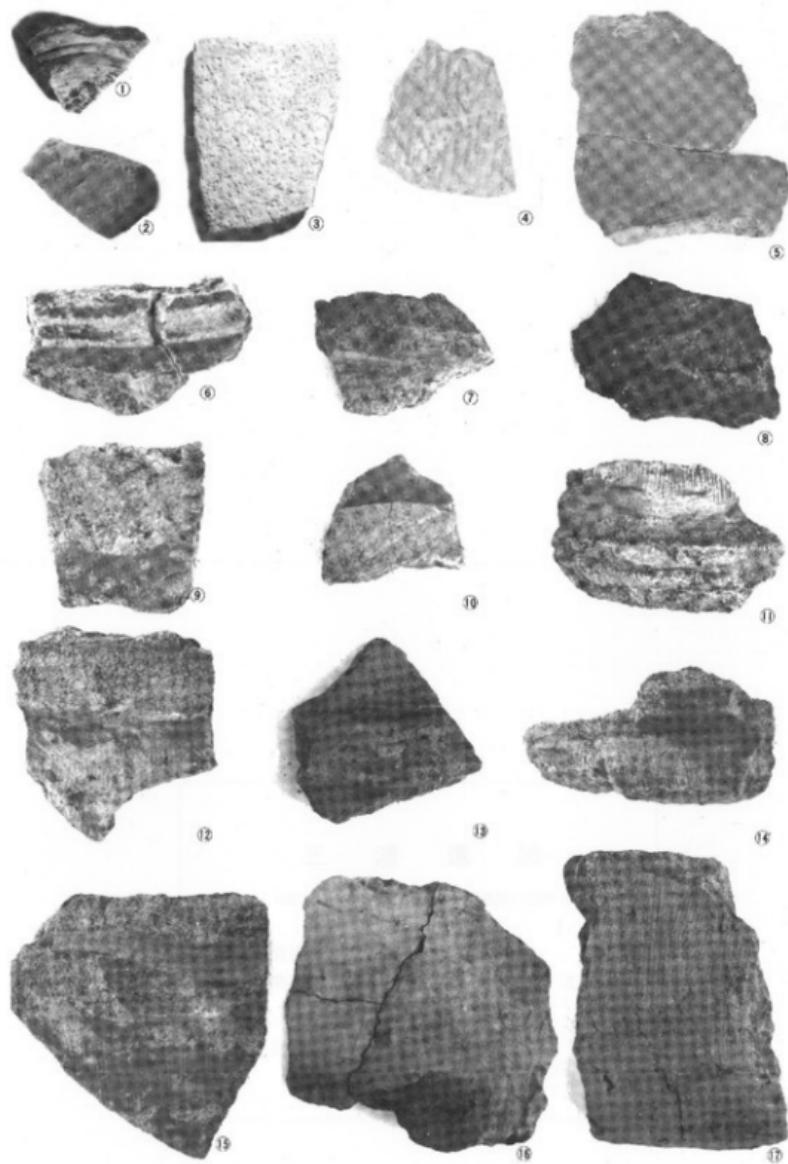


同 復元前（北東より）



同 復元後（同）

図版 16 (三浦一號墳出土遺物)



### 三浦遺跡

鳥取大学構内における考古学遺跡の調査Ⅱ

発行日 昭和 57 年 1 月 31 日

発行者 財団法人鳥取県教育文化財团  
〒680 鳥取市扇町 21  
TEL (0857) 27-5252

印刷谷岡印刷  
〒680 鳥取市元町 126  
TEL (0857) 26-2001